

**主 題：明らかにされる信仰の真価 2**  
**聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章11節**

パウロは「教会が霊的に成長することの大切さ」をコリント教会に教え続けました。この「教会」は建物を指していないことは明らかです。教会を構成している信仰者ひとり一人を指すのです。クリスチャンたちは主から大切な使命をいただいている。だから、成長することが必要だとパウロは言うのです。

私たちが信仰において成長するなら、その使命をしっかりと果たしていくことができます。その使命とは、私たちがこの世にあって主イエスを人々の前に明らかにすることです。私たちの主を周りの人々にハッキリと示すこと、それが私たちが救われ生かされている目的であり、そのことを神は望んでおられと、そのことを見て来ました。目に見えない神を私たちは形をもって、このような方が私たちの神であると示す、そんな大きな務めを私たちは主からいただいています。

パウロはIコリント3：11から、そのためにはどうすればいいのかということ具体的に教えようとしています。パウロは、あなたが主を明らかにしていこうとするなら、言い方を変えるなら、神の前に価値ある人生を生きようとするなら、一番大切なことは、先ず、あなた自身が正しい土台を据えることだと言います。そのことを教えるのです。

**\*それぞれが「主イエス」という正しい土台の上に立つことが必要**

**B. 各人の歩み、働き 11節**

**1. 正しい土台を据える**

パウロはコリントの町を訪問し、そして、この町にあって、正しい土台を据えた人々が起こることを願って働きをしました。彼は神のみことばを正確に語りました。しかも、神のことばを余すところなく、神の計画のすべてを語りました。

余談になりますが、実は、この「神のことばを正確に語る」ということが大きな問題になるということ、そのことをパウロは知っています。ですから、IIコリント2：17で「私たちは、多くの人のように、神のことばに混ぜ物をして売するようなことはせず、真心から、また神によって、神の御前でキリストにあって語るのです。」と言っています。パウロは、神のことばに何も混ぜてはいけなく、神のことばに人間の思いや考えを混ぜてはいけなく、私たちの語りたことを聖書を使って語るのでもないと言います。それは大きな罪です。でも、教会がそのように流されていくことを知っているのです。そして、そのような教会が存在することも私たちは知っています。私たちが教師としてしなければならないことは、神のことばを正確にその計画を余すところなくしっかりと伝えることです。

人々がどのような反応をしようと、神がそれを命じられた以上、それが私たちが為さなければならない働きです。そのことをパウロは教えただけでなく、パウロはそのように歩んだのです。私たちの主がどんなにすばらしいお方を人々に示すという価値ある人生をあなた自身が過ごしていくためには、あなた自身がこのパウロが教えた正しい土台をしっかりと据えて、その上にあなたが立つことです。それがすべてのスタートであるとパウロは私たちに教えたのです。

11節をご覧ください。「というのは、だれも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」、すでに据えられている土台、すなわち、主イエスという土台を据えた人は、他の土台を据えることはできないと言います。なぜなら、主イエスの土台だけが人に喜びを与える人生を歩むことを可能にするからです。イエスという土台だけが主に喜ばれる人生を可能にしてくれるのです。二つの土台に立っているならそのような歩みをするのは不可能です。かつての私たち、そして、今も多くの人たちがイエス・キリスト以外の土台を据えてその上に立っています。様々な土台があってその上に自分の人生を建て上げています。

**1) マルコ7：1-9**

聖書を見ると、多くの人たち、特に、ユダヤ教のリーダーたちは伝統や昔からのしきたり、慣例に立っていたことが記されています。ユダヤ教の教師たちは人間の教え、しきたりに立っていたのです。マルコ7章に、イエスの周りにパリサイ人たちや律法学者が集まって来た時の様子が書かれています。その時に彼らが見たことはイエスの弟子たちが手を洗わないでパンを食べている様子でした。そこで彼らはイエスに尋ねるのです。マルコ7：5「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えに従って歩まないで、汚れた手でパンを食べるのですか。」と、彼らは「なぜ、あなたの弟子たちは昔の人たちの言い伝え

に従わないのか？そのように教えられて来たではないか？手を洗うようにと…」と言います。もちろん、彼らの中では複雑な手洗いの儀式がありました。

この人たちの中には「成文律法」と「口伝律法」がありました。「成文律法」とは聖書に書かれている律法のことです。問題は「口伝律法」です。これは律法学者たちが長年に亘って作り上げて来たものです。様々な言い伝えを集めたものが「口伝律法」です。それは時代とともに受け継がれて来た伝統なのです。そこで、彼らはそれを引き合いに出して、「なぜ、あなたの弟子たちは昔から伝えられていることを守らないのか？」とイエスを非難したのです。そこでイエスが彼らに対して語られたことは彼らには非常にショッキングなことだったでしょう。7：8に「あなたがたは、神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っている。」とあります。「あなたがたがしていることを神が喜ばれるとするのは大間違いだ。あなたがたは人間の教えをただ継承しているに過ぎない。」と言われたのです。

この人たちの問題は何だったのか？彼らはユダヤ教のリーダーでした。旧約聖書に通じていました。でも、この人たちが土台にしたのは「自分たちのこれまでの伝統」でした。このように教えられて来たから…と。彼らはそのことについて主イエスから直接メッセージを聞いても正しい土台を据えようとはしなかったのです。驚きです。人となられた神、イエス・キリストが神のメッセージを語っても、彼らはそのメッセージよりも人間の伝統を重んじたのです。彼らにとってはこの伝統こそが最も大切なものだったのです。それが彼らの土台だったのです。彼らはそれを捨てようとはしなかったのです。

## 2) 使徒の働き 17：22

また、宗教という土台があります。パウロがアテネの町を訪問したときのことを憶えておられるでしょうか？町が偶像でいっぱいなのを見ました。そこでパウロはアレオパゴスの丘でメッセージを語りまします。アテネ市内が一望できる高台です。このように言っています。使徒 17：22「アテネの人たち。あらゆる点から見て、私はあなたがたを宗教心にあつい方々だと見ております。」と。「宗教心にあつい方々」と言っています。ですから、彼らは様々な祭壇を作り、もしかすると、自分たちの知らない神がいるかもしれないと言って「知られない神に」という祭壇を作りました。

でも、どんなに熱心に宗教を信じたとしてもそこに救いはありません。だから、このときにパウロは「宗教心にあつい」人たちに向かって救いのメッセージをします。宗教は人を救いません。それは人間の考えだからです。この日本では平成28年度の文化庁の調べでは、18万1711の宗教団体が存在していると報告しています。悲しいことに、人々は自分がいったい何を信じているのか？信じていることが本当に真実なのかどうか？そのことを確かめようとはしません。昔からそのように信じていたからと、何があってもそれを捨てようとはしません。

宗教に救いが無いことをパウロ自身が言っています。ガラテヤ書 1：14、15「14 また私は、自分と同族で同年輩の多くの者たちに比べ、はるかにユダヤ教に進んでおり、先祖からの伝承に人一倍熱心でした。」、彼はユダヤ教、その教えについては他の人たちよりも群を抜いていたのです。旧約の教えをよく知っていたのです。そして、彼もユダヤ教のリーダーの一人として様々な律法を熱心に行っていました。でも、彼は救いに与ってはいないと言います。「15 けれども、生まれたときから私を選び分け、恵みをもって召してくださった方が、」と、「私の行いではない。私が熱心に宗教を行ったから、守ったから救いに与ったのではない。すべては神の恵みである。」と言うのです。私たちもその通り「アーメン」と言います。

人間の作り出した宗教に救いはありません。救いは神の一方的な恵みによって与えられるものです。

## 3) ルカ 12：13-21、I テモテ 6：17

この地上のもの、それを土台にしている人たちはどうでしょう？このときもたくさんいたでしょう。そういう人たちは今も世の中に溢れています。このような例があります。イエスが歩いていた時は必ず群衆がその周りを取り囲みました。群衆の中の一人がこのように言います。ルカ 12：13「先生。私と遺産を分けるように私の兄弟に話してください」と言った。」と、遺産相続についてイエスに質問するのです。14節「すると彼に言われた。「いっただれが、わたしをあなたがたの裁判官や調停者に任命したのですか。」と答えられ、そして、人々に言われました。「どんな貪欲にも注意して、よく警戒しなさい。なぜなら、いくら豊かな人でも、その人のいのちは財産にあるのではないからです。」と。

何が最も大切なのかをしっかりと考えるようにと言われたのです。なぜなら、この人の関心はお金のことだけだったからです。どうすれば少しでも多く遺産をもらうことができるかと、その調停をイエスに申し出るのです。

そして、その後で話されたたとえが「ある人の畑が豊作であった」という話です。12：17-19「17 そこで彼は、心の中でこう言いながら考えた。『どうしよう。作物をたくわえておく場所がない。』18 そして言った。『どうしよう。あの倉を取りこわして、もっと大きいのを建て、穀物や財産はみなそこにしまっておこう。』19 そして、自分のたましいにこう言おう。「たましいよ、これから先何年分もいっぱい物がためら

れた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」』、そのときに神が何と言われたのか？ 20-21節「:20 しかし神は彼に言われた。『愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。』:21 自分のためにたくわえても、神の前に富まない者はこのとお

りです。」、I テモテ 6 : 17にも「この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」と書かれている通りです。

こうしてイエスが教えようとしたことは、自分にとって最も大切なものは何？それはお金だ、この地上のいろいろな物質的なものと言う人たちに対して、「愚かだ。永遠に続かないものを自慢するなんて愚かなことだ」と、彼らが立っていたその土台が間違っていることを指摘されたのです。

このコリントの教会はパウロを通して働きが始まったのですが、そのときに、みことばを通して私たちはすでに学んで来ていますが、コリントの人たちの関心は人間の知恵でした。それが彼らの土台でした。その中から救われる者たちが起こって来たのですが、当然、彼らはそのような影響を受けていたことを私たちは何度も見て来ました。救いに与った者たちに神はパウロを通して「しっかりとあなたが信じた土台に立つように」とそのことを言うのです。ですから、私たちは伝統であったり、宗教であったり、この地上の物質的ないろいろなものであったりと、それらに土台を据えようとする者です。

#### 4) II テモテ 3 : 2-5

もう一つ言えるのは「自分自身の上に土台を据えている人たち」で、そのような人たちがいることは間違いないでしょう。パウロはこの世の終わりのことについて語っています。II テモテ 3 : 2-5「:2 そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、:3 情け知らずの者、和解しない者、そしめる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、:4 裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快樂を愛する者になり、:5 見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。」、ここにあるように「神よりも快樂を愛する」のです。本来なら、神を喜ばせる私たち被造物であるはずなのに、神ではなく自分を喜ばせるのです。自分を喜ばせるためにすべてのことを行おうとします。自分が楽しければ、自分が満足すればそれでいいとするのです。すべての中心が「自分」で、最も大切なのが「自分」なのです。神よりも自分が大切なのです。

ですから、私たちはいろいろなものを土台にして生きて来たのです。みことばが教えることは、もし、あなたが神の前に価値ある人生を歩みたいと思うなら、その人生のスタートは先ずイエス・キリストを心に受け入れること、信じることから始まるということです。土台がイエス・キリストでなければその人生は神の前に虚しいものだということです。どんなにこの地上で成功したとしても、どんなに人々から称賛を得たとしても、裁判官である神がどう評価するかということです。神によって正しい評価を得ようとするなら、先ず、「イエス・キリスト」を人生の土台にしなければなりません。そこに立たなければいけないのです。そのことをパウロはこのようにして私たちに教えるのですが、是非、皆さんに今日、この「正しい土台を据える」ということを考えていただきたいのです。これは非常に大切なことだからです。「土台を据えなさい」と言われたなら「分かりました、据えます。」と言うかもしれませんが、では、どのようにして据えるのか？

#### 2. 正しい土台の据え方

いくつかみことばを見たいのですが、まず、マタイの福音書7章を見ましょう。ここに「どうすれば正しい土台をしっかりと据えることができるのか？」、そのことについて主イエスご自身が教えておられます。マタイ 7 : 24-27に「:24 だから、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。:25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。:26 また、わたしのこれらのことばを聞いてそれを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。:27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」とあります。

ここには2種類の人が登場しています。その違いは「わたしのことば」、すなわち、主イエスが語られた真理を聞いて「それを行う人」と「それを行わない人」です。この二つに分けられています。「聞いてそれを行う人」はまさに「岩の上に自分の家を建てる人」、つまり、救いのことです。神の真理を「聞いてもそれを行わない人」は「砂の上に自分の家を建てた人」、つまり、救われていない人のことです。27節に書かれている通りです。「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」、さばきが来るとのことです。その

ときその家は建っていることができなかつた、なぜなら、正しい土台の上に建っていなかつたからです。つまり、イエス・キリストを信じないで救いに与っていなかつたからです。

皆さんもよくご存じの聖歌236、讚美歌280、「望みはただ主の血と義にあるのみ いかでか他のもの頼りとなすべき…」、4節「ラッパの音響く日義の衣まといて 恐れず御前にこの身は立つを得ん」、コーラスはこうです。「イエスこそ岩なれ 堅固なる岩なれ 他は砂地なり」、この繰り返し部分の原詩をそのまま訳すと「キリスト、堅固なる岩の上に私は立つ それ以外はみな沈みゆく砂である」となります。マタイ7章を見ると、まさにこの賛美を書いたドワード・モートと同じように、イエス・キリストだけが堅固なる岩であつて、その岩の上に家を建てるなら神のさばきを恐れることはないけれど、それ以外のものゝ建てるならその人は悲惨な終わり方をするとみことばは教えています。岩の上に家を建てた人は、神のことばを聞いてそれを行つた人です。砂地の上に建てた人は、みことばを聞いてもそれを行わなかつた人です。

さて、この2種類の人がいることをしっかり覚えておいてください。この後、みことばから神が何を教えておられるのかを見ていきます。次は、マタイ21:28-32です。これは21:23「それから、イエスが宮に入って、教えておられると、祭司長、民の長老たちが、みもとに来て言った。「何の權威によつて、これらのことをしておられるのですか。だれが、あなたにその權威を授けたのですか。」という話し合いが為されていたことから始まっています。24節「イエスは答えて、こう言われた。「わたしも一言あなたがたに尋ねましょう。もし、あなたがたが答えるなら、わたしも何の權威によつて、これらのことをしているかを話しましょう。」と、祭司長、民の長老たち、また、ユダヤ教のリーダーたちに向かつて話しています。この人たちがいるところで28-31節「:28 ところで、あなたがたは、どう思いますか。ある人にふたりの息子がいた。その人は兄のところに来て、『きょう、ぶどう園に行つて働いてくれ』と言つた。:29 兄は答えて『行きます。お父さん』と言つたが、行かなかつた。:30 それから、弟のところに来て、同じように言つた。ところが、弟は答えて『行きたくありません』と言つたが、あとから悪かつたと思つて出かけて行つた。:31 ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。』彼らは言つた。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入つてゐるのです。」という話をイエスはされました。ここでイエスが言われていることは、父の言つたことを行ふか行わないかです。マタイ7章で見たことと同じです。2種類の人がいるのです。言われたことをするのか言われたことをしないのかです。

さて、話を進める前に、皆さんにこの箇所の新改訳聖書2017年版を見ていただきたいのです。次の通りです。『:28 ところで、あなたがたはどう思いますか。ある人に息子が二人いた。その人は兄のところに来て、「子よ、今日、ぶどう園に行つて働いてくれ」と言つた。:29 兄は「行きたくありません」と答えたが、後になつて思い直し、出かけて行つた。:30 その人は弟のところに来て、同じように言つた。弟は「行きます、お父さん」と答えたが、行かなかつた。:31 二人のうちどちらが父の願つた通りにしたのでしょうか。』彼らは言つた。「兄です。」…』。私たちが見ている第2版と違いますね。兄と弟が逆になっています。

なぜ、こういうことが起こつたのか？実は、これは翻訳の問題です。今、私たちの周りには聖書の原本というものは存在していません。翻訳の底本となるのは現存している写本に拠ります。その写本を使って翻訳するのです。私たちが今見ている新改訳第2版は「ネストレ・アーラント」の校訂本第12版を基にしています。ところが、2017年版の新改訳聖書は同じ「ネストレ・アーラント」の校訂本第28版、並びに、聖書協会世界連盟(UBS)第5版を底本としています。そこが違うのです。

ですから、どの写本を使って翻訳をするのかによつて今回のような違いが起こるのです。でも、皆さんに見ていただきたいのは、言われている内容はどちらも同じだということです。ここで言つていることは、二人の息子がいて、一人は父の言つたことを行いましたが、もう一人は父の言つたことを行わなかつた。主イエスがこのたとえを用いて何を教えたかたつたのでしょうか？人間の為す二つの選択のことです。言われたことをするのか？言われたことをしないのか？どちらかです。

### ◎人間の為す二つの選択

1) 聞いてそれを行つた人たち : マタイ21:31を見てください。「ふたりのうちどちらが、父の願つたとおりにしたのでしょうか。』彼らは言つた。「あとの者です。」イエスは彼らに言われた。「まこと、あなたがたに告げます。取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入つてゐるのです。」、つまり、ここで神のメッセージを聞いたときに、取税人や遊女たちは教えを聞いてそれを受け入れました。32節に「ヨハネが…」とあります。パプテスマのヨハネがメッセージを語つたときに、彼らはそれを聞いて悔い改めて神を受け入れました。ですから、主は「取税人や遊女たちのほうが、あなたがたより先に神の国に入つてゐるのです。」と、この人たちに永遠のいのちが与えられたことを教えるのです。カギはこの人たちは語られたこと、教えられたことを受け入れたことです。

ヨハネ3：36でこのように言われています。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」、カギはみことばを聞いて、御子に従うのか、御子に従わないのかです。どちらかの選択のことです。イエスが言われたことは、「取税人や遊女」、つまり、罪人と人々から呼ばれている人たちは、メッセージを聞いて自分たちの罪を悔い改めて救いを受け入れたということです。

2) 聞いてそれを行わなかった人たち : 32節「というのは、あなたがたは、ヨハネが義の道を持って来たのに、彼を信じなかった。しかし、取税人や遊女たちは彼を信じたからです。しかもあなたがたは、それを見ながら、あとになって悔いることもせず、彼を信じなかったのです。」、ここに同じようにヨハネのメッセージを聞いていながら信じなかった人たちのことが「あなたがたは…」と言われています。ここにあるように、イスラエルの宗教家たちです。「ヨハネが義の道を持って来たのに、」と、つまり、神の救いを教えたのに彼らはそれを信じることを拒んだのです。しかも、どんなに時間が経っても、彼らは決して罪を悔い改めて主を受け入れることはなかったのです。

**\*彼らの選択についてもう少し説明します マタイ3：1-8**

今、私たちが見ていることがここに記されています。

1) バプテスマのヨハネのメッセージ マタイ3：1-2、マルコ1：4

マタイ3：1-2「:1 そのころ、バプテスマのヨハネが現れ、ユダヤの荒野で教えを宣べて、言った。:2 「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」、これがヨハネのメッセージだとマタイが教えています。つまり、神のさばきの日が近づいている、だから、悔い改めなさい。その日が来る前に、機会があるうちに罪を悔い改めて救いに与るようにと語るのです。マルコ1：4には「バプテスマのヨハネが荒野に現れて、罪の赦しのための悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。」とあります。ここには「悔い改めのバプテスマ」と書かれています。

皆さんに気付いていただきたいのは「悔い改めのバプテスマ」ということばです。今、私たちがイエス・キリストを信じて、自分はイエス・キリストを信じて救われたという証のために受けるバプテスマは「イエスの名によるバプテスマ」です。ですから、このバプテスマとヨハネのバプテスマは違うのです。

(1) ヨハネのバプテスマはイエスの御名によってではありません。(2) また、ユダヤ人たちが繰り返し受けていたバプテスマとも違います。彼らは手や足を洗い清めていました。何度でも。でも、ヨハネのバプテスマは一度切りのものですから、このバプテスマとも違います。(3) 異邦人がユダヤ教徒に改宗したいときに受けるバプテスマがあります。このバプテスマによって彼らは「私は今まで偶像に仕えて来ましたが、それを悔い改めてこれからはイスラエルの真の神を信じます。」と表明するのです。

これを見ると、バプテスマのヨハネが語った対象はユダヤ人です。ユダヤ人は「自分たちはアブラハムの子孫だ。我々は選民だ。」という意識が強かった。また、我々は律法を遵守していると自負しているゆえに、だれ一人として自分の救いを疑う者はいませんでした。この人たちに対してヨハネは「悔い改めよ」と言ったのです。それを聞いた人たちはショックを受けたでしょう。救われていると思っている人たちにヨハネは「悔い改めなさい。あなたがたは救われていない。」と、そのようなメッセージを語ったからです。

ヨハネが語ったメッセージはマルコ1：4にあったように「悔い改めのバプテスマ」です。それは私たちと同じです。バプテスマによって救われるのではない。悔い改めて新しい歩み、すなわち、神に従って行く歩みを始めること、神の恵みに従って行くことを証明するものです。

2) 人々の選択 マタイ5：3-8

さて、人々はどのような選択をしたのでしょうか？

(1) 聞き入れた人々 3：5-6

マタイ3：5-6に「:5 さて、エルサレム、ユダヤ全土、ヨルダン川沿いの全地域の人々がヨハネのところへ出て行き、:6 自分の罪を告白して、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けた。」とあります。確かに、このメッセージを聞いた多くの人々がメッセージを受け入れて、自らの罪を告白して、そして、バプテスマを受けたのです。「悔い改める」とは「心を変える」ということです。「回心」です。これは今までの罪を振り返ってそれを後悔するとか、悪かったとか、悲しく思うとか、残念に思うという後悔だけではありません。「悔い改める」とは、自分が間違っていることに気付いて正しいことを行い始めることです。旧約聖書では「シューブ」というヘブライ語がその意味を持っています。つまり、これは「方向を変えること、方向転換」です。ですから、自分たちの間違いを心から悔いて正しいことを行い始めることです。

ヨハネが語ったことは、これまでのあなたがたの歩み、神に逆らい背いて来たその生活のすべてが間違っていたことを認めて、主に心からお詫びすること、そして、今から神に従い神に喜ばれる歩みを歩み出すこと、神を真に喜ばせる歩み方を歩み出す決心をすることです。ことばだけでなく心からの悔い改めを命じたことは言うまでもありません。なぜなら、心からの悔い改めだけが人を救いへと導くからです。ですから、先ほども説明したように、多くの人たちがヨハネのメッセージを聞いて信じてバプテスマを受けたこと、自分たちの罪を悔い改めてバプテスマを受けたこと、その光景をこうしてみことばは明らかにしてくれるのです。この人たちは自分の罪を神の前に告白して、これから神に従って行くことを決心して、ヨハネが言ったように「悔い改めのバプテスマ」を喜んで受けたのです。そうして、自分たちが悔い改めたことを形をもって証明したのです。

私たちが注意しておかなければいけないことは、ヨハネのメッセージを見たときにイエス・キリストの十字架も復活も語っていないことです。まだ、そのことをヨハネは知らなかったからです。まさに、旧約の人たちと同じなのです。旧約の人たちは救世主が来ることを信じていました。バプテスマのヨハネもそうでした。彼がイエス・キリストを見たときに「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」（ヨハネ 1：29）と言いました。この方が待望の救世主だと。彼はイエス・キリストの十字架を目撃したわけではありません。イエス・キリストの復活を目撃したわけでもありません。ですから、彼は今私たちが語るように、イエス・キリストの十字架と復活を語っていません。彼が語ったことは、「救いに与りたいならあなたは自分の罪を心から悔い改めて神に従いなさい。」です。多くの人たちがヨハネのメッセージを聞いてそれを受け入れたことが記されていました。

## (2) 聞き入れなかった人々 3：7-8

ところが、そのメッセージを聞いても受け入れない人たちのことが書かれています。3：7「しかし、パリサイ人やサドカイ人が大ぜいバプテスマを受けに来るのを見たとき、ヨハネは彼らに言った。…」

・パリサイ人たち：当時の伝統主義者です。伝統を非常に重んじていました。彼らは死後の復活を信じています。しかも、その後、人生に対して神からのほうびとさばきがあると信じていました。

・サドカイ人たち：彼らはモーセ5書（創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記）だけを信じていました。ですから、そこに記されていない「復活」や「死後のいのち」などは信じていなかったのです。

両者とも宗教的指導者であり、政治的にも権力がありました。ある学者によれば、裕福なサドカイ人は宮での商売のいっさいを仕切っていたと言います。こういう人たちがバプテスマのヨハネのメッセージを聞いていたのです。彼らは他の人たちと同じように「バプテスマを受けに来た」と書かれています。ところがヨハネはこのように言っています。7節の続きに「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。」と、大変厳しいことばです。なぜなら、ヨハネは彼らの心を見ていたからです。確かに、彼らは行動では他の人たちと同じようにバプテスマを受けに来ました。でも、彼らは自分の罪を神の前に悔い改めることをしなかったのです。そこに問題があるのです。罪の意識もなかったし、罪への悔い改めもありません。彼らはことばでは神を知っているようでした。そこでヨハネは「もしそうならそれを行いで示しなさい」と言いました。3：8に「それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。」とあります。

なぜ、こんなことを言ったのか？救いには必ず証拠が伴うからです。救われた者にふさわしい歩みを始めるからです。神がくださった救いは、私たちが罪から救うだけではありません。永遠のさばきからの救いだけではない。私たちが新しい歩みを歩み出すために私たちが新しく生まれ変わらせてくださるのです。パウロはこう言っています。エペソ2：10「私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」と。みことばが教えるように、救いに与った者たちは神に喜ばれる正しい歩み、良い行いをしていく。良い行いによって罪を赦していただく人、罪からの救いをいただく人はだれもいません。どんなに良い行いを積んだとしても救いに与ることはありません。神の恵みによって救われるのです。でも、救いに与った人は良い行いをします。それがこのみことばが私たちに教えることです。

では、どのような良い行いが生まれて来るのか？「主への従順な歩み」です。ですから、ヨハネはこう言っています。Iヨハネ2：3-4「:3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。:4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。」、救われているかどうかは、その人が神のみことばに従っているかどうか、神の命令を守っているかどうかによって示されると言うのです。もちろん、私たちは神の命令を守りたいと願っていても100%守り切れません。でも、少なくとも、私たちの心の中にはそのよ

うに歩いていきたいという思いがあります。なぜなら、私たちは新しく生まれ変わったからです。新しく生まれ変わった者はそういう新しい願いを持ちます。神に従って行こうとするのです。

ですから、ヨハネは神を知っている、つまり、救われていると言っているが、神の命令を継続して習慣的に守り続けられないならおかしいと言います。偽り者だと言います。思い出してください。私たちはどのような決心をして神を信じるようになったのか？今までの神に逆らって来た自分の罪を神の前に告白して、真の神であり救い主である方に従って行く決心をしたのです。だから、私たちの歩みはこのお方に従うという歩みです。

このように同じようにヨハネのメッセージを聞いていて、ある人は信じた。罪人と呼ばれて、宗教家たちから蔑まれていた者たちはこのメッセージを受け入れて救いに与るのです。宗教家たち、救われていると自負していた彼らは、救いのチャンスがあったのにそれを自らの選択で逃してしまうのです。悲しいことは、まさに、この宗教家たちと同じような人々が今もたくさんいることです。ここにおられる皆さんがそうでないことを心から願います。

イエス・キリストを周りの人たちに明示する人生を送るためには、主の前に価値ある人生を過ごすためには、まず、あなた自身が主イエスをあなたの人生の土台に据えなければなりません。そうでなければ、どんなに見た目には喜ばれるような生活をしていても、神の前に立ったときにその人生は虚しかったこと、大きな間違いであったことが神によって明らかにされるのです。イエス・キリストを人生の土台に据えた人についてペテロはこう言います。I ペテロ 1 : 3 「私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。」と。

**\*主だけがこのような「新しい人生」を生きることを可能にしてくださいます。**

新しく生まれ変わらせて「生ける望みを持つようにしてくださいました。」とペテロは言います。私たちは今日死んでも生きるという希望をもっています。死んでも私たちはイエスの許で、そして、神の許で永遠を過ごすことを知っています。私たちはこの「生ける望み」を持って生きる者として生まれ変わったのです。これが神だけが与えることの出来る祝福です。そして、それをいただいた私たちを神は新しく導いてくださるのです。

イエスを私たちの人生の土台と据えることがなぜ価値ある人生に必要なのか？それはこの方だけが救い主、創造主だからです。目的をもって私たちを創造されたお方ゆえに、どのように生きることが正しいのかを教えてくださいます。同時に、この方だけが「さばき主」だからです。みな、私たちはこの方の前に立つのです。ゆえに、この方だけが本当に価値ある生き方はどのように生きることなのかを教えることができる唯一のお方です。だから、私たちはこのお方に聞かなければいけないのです。そして、教えることは「まず、土台を据えなさい」です。そして、土台を据えた私たちが主が喜んでくださることを願いながら、すべてのことを主のために行っていくのです。主が喜んでくださることを願ってすべてのことを行うのです。なぜか？それは主イエス・キリストが私たちにとって最も大切な存在だからです。彼が私たちの人生の土台だからです。

最後に、ペテロはこのように言っています。I ペテロ 2 : 6 「なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」、イエス・キリストを信じる人は絶対に失望させられることはない。これは神からのメッセージです。それを聞いたあなたはどうかされますか？神に従うのか、従わないのか…。土台を据えている方、イエスが土台の方、主に感謝をもって、主が喜んでくださることを選択しながら生きることです。

もし、まだイエスを土台としていない方がおられるなら、心からお勧めします。イエス・キリストを土台に据えることです。この方を土台として生きるなら、それは決して無駄な人生ではない、決して価値のない人生ではないからです。その人生を今から歩いてください。心からお勧めします。